

看護職の介護支援専門員の実態から見たもの ～平成 28 年度 看護職における介護支援専門員のアンケート調査から～

愛知県看護協会在宅ケア推進委員

内藤 喜久枝・齊田 浩一・榎林 美咲・上出 かつ枝
酒井 妃富美・若園 尚美・竹下 真由美 久間 美智子

I はじめに

少子高齢社会が急激に進みこれからの医療介護問題が取りざたされる中、ついに国も数年前から地域包括ケアシステムの構築を提唱しはじめた。住民がこれから最後まで住み慣れた地域で尊厳を持ちながら在宅生活をおくるのに欠かすことのできない在宅医療や介護の連携に焦点を当て、医療と介護を結ぶ専門職の介護支援専門員に医療知識のある看護職が担う重要性を鑑み、県内の居宅介護支援事業者及び地域包括支援センターに実態把握のためのアンケートを実施した。介護支援専門員ができた当初は、医療系の介護支援専門員は少なからずいたが、現在介護支援専門員業務についている介護支援専門員は約 8 割が福祉・介護職であり、看護職は 2 割を割り込んでいる現状になっている。平成 25 年全国調査¹⁾より

II 目的

現在でも看護職でありながら介護支援専門員を続けている理由等についてアンケート調査をし、今後の看護職の介護支援専門員への増加を検討する一助にする。

III 方法

1 対象者

県内の居宅介護支援事業者及び地域包括支援センター

2 調査機関

平成 28 年 9 月 1 日から 30 日までの回収期間とした。

3 方法

アンケートは、施設管理者用と看護職のケアマネジャー用の二種類に分け各施設に郵送した。対象施設は 2,024 施設に送付した。集計方法は単純集計とした。

アンケートの質問項目

- ① 居宅介護事業所の対象者の勤務体制と年齢、性別、保有資格、及び医療処置の必要な支援数と医療処置内容
- ② 看護職のケアマネジャーには、性別、年齢、勤務形態、資格取得後の年数、介護支援専門員としての従事年数、ケアマネジャーの仕事に就いたきっかけ、仕事を継続している理由、主任介護支援専門員の有無等

4 倫理的配慮

対象者には、調査の趣旨、匿名性の保持、協力は自由意志、調査で得られたデータは他に使用しない事等文

書で説明した。

IV 結果

- 1 731 施設から回答があり回収率は 36.1%だった。また、看護職ケアマネジャーは 522 人の回答があった。
- 2 回答した居宅介護支援事業及び地域包括支援センターの介護支援専門員の実数は（常勤、非常勤合わせて）2,477 人だった。男女別では女性 2,049 人で（82.7%）で男性は 428 人（17.3%）だった。
- 3 年代別には 50 代が最も多く 876 人（35.4%）で次いで 40 代 825 人（33.3%）60 代 396 人（16.0%）30 代 358 人（14.5%）20 代 22 人（0.8%）だった。
- 4 介護支援専門員の有している資格（複数回答）は、2,685 人中では、介護福祉士が最も多く 1,426 人（53.1%）次いで看護職 532 人（19.8%）社会福祉士 377 人で次いで薬剤師と続いた。内女性は、2,138 人（79.6%）で男性は、547 人（20.4%）だった。
- 5 医療処置等の必要な支援数の回答では、認知症で服薬管理が必要な利用者が最も多く 12,137 人（54.8%）次いで、胃瘻・経管カテーテルを利用者 1,234 人（5.6%）自己注射（インシュリン）等利用者 1,217 人（5.5%）吸引の必要な利用者 1,095 人（4.9%）、褥瘡の処置が必要な利用者 1,018 人（4.6%）と続いた。
- 6 基礎資格が看護職のアンケートでは、性別は女性が 459 人（95.0%）、男性が 24 人（5.0%）だった。
- 7 年代別では、50 代が最も多く 218 人（41.9%）続いて 40 代 156 人（29.9%）60 代 108 人（20.7%）30 代 33 人（6.3%）20 代 6 人（1.2%）だった。
- 8 介護支援専門員資格取得後の年数は、10～14 年が 202 人（38.1%）15 年以上 172 人（32.5%）5 年未満 96 人（18.1%）5～9 年が 60 人（11.3%）だった。
- 9 ケアマネジャーとしての従事年数は、10～14 年 209 人（40.7%）5 年未満 114 人（22.2%）、15 年以上 99 人（19.2%）5～9 年は 92 人（17.9%）だった。
- 10 ケアマネジャーのきっかけ（複数回答）の問いには、「利用者の生活をマネジメントしたかった」が 250 人で最も多く、次いで「夜勤がない」246 人「病院で働くより地域での連携・調整がしたかった」200 人「土日に休みがある」144 人「規則的な勤務だから」124 人「腰痛があった」114 人、「あこがれの人から」34 人「時間外労働が少ないから」23 人と続いた。

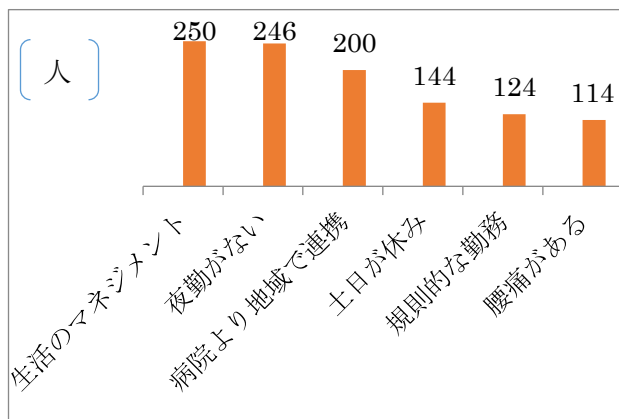


図1 ケアマネジャーを継続している理由(複数回答)で「やりがいがある」117人が最も多く「夜勤がないから」87人「自分に合っている」77人「うまく言えないが好きだから」68人「看護師の仕事には戻れないと思った」61人「土日の休みがある」45人「辞める理由がなかった」「規則的な勤務だから」44人「役職に就いていた」32人「やめさせてもらえなかった」「時間外労働が少ないから」11人だった。

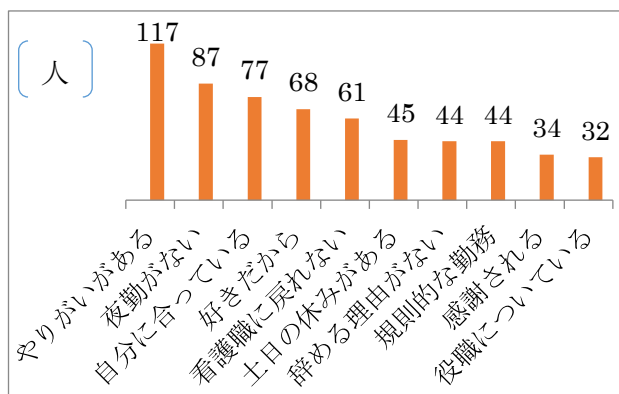


図2 ケアマネジャーを継続している理由

V 考察

アンケート結果から、ケアマネジャーは介護職の女性が最も多く、次いで看護職の女性であった。今後利用者の生活を全体的にマネジメントし、地域の中での支援まで考えると、やはり生活を支える視点が欠かせない職種であり、在宅での医療をも見据えた場合、看護職種はさらに不可欠になると思われる。平成25年全国調査²⁾では、「医療系資格を持たないケアマネジャーのほうが、主治医と話しあう機会が少なく、コミュニケーションをすることへの苦手意識、上下関係、医療に関する難解な用語についての分かりやすい説明が得られないことを困難点として認識している割合が高い」結果であった。ケアマネジャーには医療・介護・生活・予防・住まいを総合的に連携していくことがさらに求められ、特に医療分野での連携を考慮すると、これから介護・福祉職と同人数程度の看護職のケアマネジャーが、必要になってくるとと思われる。また、看護職がケアマネジャーになるきっかけは、「利用者の生活のマネジメントしたい」「地域の中での連携・

調整がしたい」が最も多かったが、「夜勤がないから」「土日の休みがあるから」等の勤務体制を考慮した回答も多く見られた。一方この職を続けている理由については、「やりがいがある」「自分に合っている」「好きだから」等とケアマネジャーの職に対する充実感や満足感等に由来していることであることが窺えた。ただ「夜勤がないから」は次いで多く、ワークライフバランスはやはり考慮に入れる要素であることも窺えた。継続理由と年代別とのクロス集計ではどの年齢でも同様の結果となった。さらにケアマネジャーの看護職の年齢層では、50代40次に次ぎ60代以上が多く、年齢が高くなっても続けられている職であることが分かった。また介護支援専門員の取得後の年数は、10年～14年が最も多く若い時に取得し、臨床を経験しながら年齢が高くなってからも続けられ、平井ら³⁾の調査でも看護師の将来取得したい資格としてケアマネジャーが最も多いことが分かった。このことはケアマネジャーの知識が今後の業務にも必要になってくることが窺える。近年介護支援専門員の合格率は、約15%前後と難関であることを考慮すると、20代や30代の若い世代に受験する事が大切かと思ひ、今後も看護職のための介護支援専門員試験対策講座等の資格対策の必要性を感じた。

VI 結論

今回のこの結果から

- 1 ケアマネジャーの仕事のつきたきかけ
「利用者の生活をマネジメントしたかった」が最も多かった。
- 2 ケアマネジャーを続けている理由
「やりがいがある」が最も多かった。
等の看護職のケアマネジャーの実態の一部が分かった。
今後増加対策の一助になったら幸いである。

謝辞

本調査にご協力いただいた、居宅介護支援事業者及び地域包括支援センターの皆様方に心から感謝いたします。

<引用及び参考文献>

- 1) 居宅介護事業所及び介護支援専門員業務の実態に関する調査報告書、株式会社三菱総合研究所発行、P12 (2014)
- 2) 居宅介護事業所及び介護支援専門員業務の実態に関する調査報告書、株式会社三菱総合研究所発行、P234 (2014)
- 3) 平井さよ子他：I市立病院の看護職のキャリア開発に関するニーズと職務満足度における調査、愛知県立看護大学紀要、vol7.P55、(2001)